

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380210

研究課題名(和文)バルト諸国の移民と政治：「メモリーとアイデンティティ」に関する問題の考察を通して

研究課題名(英文)The immigration and politics: focusing on the problem regarding "Memory and Identity"

研究代表者

河原 祐馬 (KAWAHARA, Yuma)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：50234109

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、移民の政治行動について、民族の歴史認識と密接に結びついた「集団的メモリー」やそれを核とする「ナショナル・アイデンティティ」の形成をめぐる問題との関連において、エストニアとラトヴィア両国におけるロシア語系住民の社会統合問題を主たる対象として考察しようとするものである。本研究は特に、「アイデンティティの可変性」といった視点に目を向け、主として、エストニアをはじめとするバルト諸国におけるロシア語系住民の社会統合問題と歴史認識問題との政治的関係性を明らかにしようとする学術的な試みである。

研究成果の概要(英文)：This research will examine several problems regarding the social integration of Russian-speaking population in the Baltic states, including Estonia, focusing on some problems in relation to the collective memory and the national identity, which are closely connected with the historical awareness between nations. Particularly, the case will be examined the political behaviors of the Russian-speaking population in Estonia and Latvia, from the viewpoint conforming to the variability of identity. Mainly, this research attempts to disclose the political relationship between the problem of social integration and the issue of historical awareness in the Baltic states, including Estonia.

研究分野：バルト三国研究、ロシア政治・外交、移民問題など

キーワード：エストニア ラトヴィア ロシア 移民と政治 社会統合 歴史認識 メモリー アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が加速する冷戦後の今日、労働力の国際移動などによって惹起される移民問題への対応は、受け入れ国と送り出し国の両国政府にとって避けがたい政策上の懸案となっており、中でも、外国人移民の定住化をめぐる問題は従来の伝統的な国民国家の在り方に大きな変容をもたらす要因の一つになっている。D・ヘルドとA・マクグリュ(1999)は、国民とはアイデンティティと一体的な政治的運命を共有する階級横断的な集合体であり、その表出形態は多様なものであると指摘しているが、こうした多様な形態で進行する国民国家形成プロセスをめぐる問題との関わりの中で、今日、アイデンティティを固定的なものとして捉えるのではなく、その「可変性」を議論する研究に注目が集まっている。S・ホール(1993)は、アイデンティティが「変換と差異を通じて生産または再生産されるものである」とし、I・シャピロ(2005)は、それが状況、誘因および制度上の規則に順応するものであり、そうした制約条件の改変を通じて、民主主義により適したアイデンティティの発展の可能性について論じている。また近年、こうした「アイデンティティの可変性」をめぐる議論との関わりにおいて、特に、ナショナル・アイデンティティの形成と変容プロセスをめぐる問題に焦点を当て、こうしたナショナル・アイデンティティの核となる「集団的メモリー」の役割の重要性について論じる研究が脚光を浴び始めている。M・アルプヴァクスは、過去は現在の関心によって形づくられる社会的構成物であるとし、「集合的メモリーが現在におけるわれわれのアイデンティティの形成において最重要の役割を演じる過去について言及するものである」と論じているが、1980年代以降、こうしたアルプヴァクスの観点をさらに発展させる形で、回想や記憶および記念碑などの社会的意味づけをめぐる問題についての学術的な関心が高まっている。

2. 研究の目的

本研究は、こうしたメモリーとアイデンティティをめぐる今日的な議論に照らして、対ロシア関係を視野に置きつつ、エストニアとラトヴィア両国におけるロシア語系住民の政治行動についての学術的な考察を試みようとするものである。これらバルト諸国には約半世紀にわたるソ連時代に大量の東スラヴ系移民が流入し、1991年のソ連からの独立以後、これらロシア語系住民の市民権および社会統合をめぐる問題が大きく政治化するプロセスを辿っている。最近では、第二次大戦時の諸事件に関わる歴史的評価をめぐる、いわゆる「メモリー戦争」がバルト諸国とロシア双方の間で展開されており、「占領」

か「解放」か、といった相容れない異なる歴史認識に基づくこれら国家間のアイデンティティ・ポリティクスの影響下、バルト諸国のロシア語系住民は自らの立ち位置をめぐって難しい政治的選択を迫られている。近年、移民の政治行動が、欧米を中心とする移民受け入れ国の政情に無視し得ない一定の影響を及ぼすことになってきており、最近の研究動向をみると、たとえば、米国の外国人移民の政治行動について、政治心理学的手法をもちいて分析を試みたK・ヘイニー(2008)や北・東欧諸国におけるホロコーストをはじめとする集団的メモリーを主たる題材としたJ・ハックマン(2010)の研究などが、本研究の基本的な着想を得る上での興味深い先行研究となっている。

以上の状況を踏まえて、本研究は、エストニアとラトヴィアの事例を主たる対象としたバルト諸国の政情に対するロシア語系住民の政治行動の影響についての学術的な考察を行おうとするものである。その際、一つの重要な研究視点として、受け入れ側のエストニアおよびラトヴィアがソ連からの独立後に採ってきたメモリー・ポリティクスを中心としたアイデンティティ・ポリティクスを主眼とする社会統合政策についてのこれまでの主要な経緯を踏まえて、「アイデンティティの可変性」という文脈の中で、第二次大戦時の諸事件をめぐる歴史認識問題にも着目し、ロシア語系住民の政治行動をめぐる問題が、受け入れ側のバルト諸国と送り出し側のロシア双方の政情および両国間関係にどのような外交上の政治的影響を及ぼすものであるのかということについての考察も併せて行う。このように、本研究では、特に、メモリーとアイデンティティをめぐる問題に照らして、ロシア語系住民の政治行動を主たる対象とするバルト諸国の事例についての考察を通して、グローバル化が進行する今日の国際社会における移民と政治をめぐる問題の一端について解明することを基本的な研究目的としている。

3. 研究の方法

本研究が、研究期間内に明らかにするべき主たる研究上の課題は、1)選挙における投票行動、支持政党の選択および議会における利益代表といった移民の政治行動に関わる問題の分析を通して、エストニアとラトヴィア両国におけるロシア語系住民の適応戦略やその政治的影響をめぐる問題についての考察、2)「アイデンティティの可変性」をめぐる議論を踏まえて、移民一世および二世以降の世代間の比較分析を通して、エストニアとラトヴィア両政府のメモリー・ポリティクスを中心としたアイデンティティ・ポリティクスを主眼とする社会統合政策の展開とロシア語系住民コミュニティにおける歴史認識問題に関連した第二次大戦時の諸事件に関

する政治的言説等の変遷プロセスとの連関性についての考察、および、3)競合する歴史認識問題の背景にあるアイデンティティ・ポリティクスとの関連において、ロシア語系住民の政治行動をめぐる問題が、移民政策をめぐる受け入れ側のエストニアとラトヴィア両国および送り出し側のロシア双方の外交関係に及ぼす政治的影響についての考察、を行うことである。以上の主たる課題を遂行するために、大別して、1)移民のメモリーとアイデンティティおよび移民の政治行動に関わる問題についての理論や思想、先行研究の整理と考察、2)バルト諸国における移民の政治行動とその影響およびアイデンティティの可変性をめぐる議論を踏まえた移民のメモリーとアイデンティティに関わる問題についての調査と分析、3)これら調査・研究データの分析に基づくバルト諸国における移民の政治行動とその影響およびメモリーとアイデンティティをめぐる問題とのバルト諸国における移民の政治行動との連関性についての比較的視点を交えた実証分析、といった3つの主たる段階を踏まえて、移民の政治行動について、民族の歴史認識と密接に結びついた集団的メモリーやナショナル・アイデンティティの形成をめぐる問題との関連において、エストニアとラトヴィア両国におけるロシア語系住民の社会統合問題についての具体的な分析および考察を行うという研究上の方法を採用した。

なお、研究期間の3年間において、調査資料の収集・整理および海外調査を行い、本研究が取り組むべき研究課題に関わるテーマについての論文等の執筆および本研究における研究調査・分析等についての研究会等での公表に努めた。また、ロシア語系住民をはじめとする移民外国人問題についての最新資料、関係各国の移民政策および移民の政治行動等関係資料の収集を国立国会図書館やジェットロビジネスライブラリー等で行い、海外研究調査に関連した取り組みとしては、バルト三国における研究関係資料の収集、関係各国の移民政策担当官庁および大学等の研究所機関、関係NGOを対象としたレビューを含めた研究調査、現地研究者との研究交流を実施した。

4. 研究成果

本研究は、移民の政治行動について、集団的メモリーとそれを核とするナショナル・アイデンティティの形成をめぐる問題との関連において、エストニアをはじめとするバルト諸国におけるロシア語系住民の政治行動と社会統合問題の考察を主たる研究課題とするものである。研究期間の間において、これまでに蓄積した調査・研究データを踏まえて、バルト諸国におけるメモリーとアイデンティティに関する歴史認識問題と当該諸国の移民の政治認識もしくは政治行動との関

連性についての比較的観点に基づく実証分析をさらに進め、本研究の集大成となる研究成果報告書の作成など、研究成果のアウトプット面での研究活動を中心に、本研究課題の総括となる基本的な作業に取り組んだ。最終年度となる平成30年度の末、本研究の研究成果を取りまとめた研究成果報告書『バルト諸国の移民と政治「メモリーとアイデンティティ」に関する問題の考察を通して』(全53頁)を作成した。本報告書は、序論と結びおよび2本の論文で構成されており、第1章では「バルト諸国の市民権政策とロシア語系住民問題」と題して、エストニア・ラトヴィア両国の市民権政策および非市民の帰化プロセスを主たる分析対象に据えて、これら両国におけるロシア語系住民の社会統合問題についての考察を行った。また第2章では「エストニアにおける民族間統合と歴史認識問題」と題して、エストニアの戦争記念碑問題を中心に論じつつ、エストニアのネーション・ビルディングとメモリー・ポリティクス、さらには、同国とロシアとの間の歴史認識問題をめぐる外交関係の分析を通して、バルト諸国における歴史認識問題と移民であるあるロシア語系住民の歴史認識および政治行動についての総括的な考察を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

河原祐馬、ロシア連邦憲法裁判所と政治の司法化、日本法学、査読有、82巻3号、2016、703-734

河原祐馬、ロシアにおける政治の「司法化」：憲法監督制度をめぐる問題との関連で、岡山大学法学会雑誌、査読無、64巻3・4号、2015、1-32

〔学会発表〕(計1件)

河原祐馬、ロシア憲法裁判所と政治の司法化、日本比較政治学会、2016年6月25日、「京都産業大学」(京都市南区)

〔図書〕(計3件)

河原祐馬、木村幹、玉田芳史 他、晃洋書房、政治の司法化と民主化、2017、280(219-244)

河原祐馬、志摩園子 他、明石書店、ラトヴィアを知るための47章、2016、336(197-201)

河原祐馬 他、木鐸社、代表と統合の政治変容、2015、359(323-324)

〔その他〕

研究成果報告書『バルト諸国の移民と政治「メモリーとアイデンティティ」に関する問題の考察を通して』、2018年3月、53頁

岡山大学法学部ホームページ
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/law/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

河原 祐馬 (KAWAHARA, Yuma)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教

授

50234109